

〈史料研究〉

クリストフ・ヴィティヒ『アンチ・スピノザ』を読む(2)

訳と注解

笠松 和也

本稿では、『人文×社会』第5号に掲載された史料研究「クリストフ・ヴィティヒ『アンチ・スピノザ』を読む(1)——訳と注解」¹の続きとして、『アンチ・スピノザ』中の『エチカ』第1部定義2の吟味から定義5の吟味までの訳と注解を示す。

訳と注解

〔凡例〕

- [] は訳者による補いを示す。
- () は原文における引用中に挿入された原著者による補足を示す。
- 原文で段落のない箇所についても、内容に応じて適宜段落分けをした。
- 脚注はすべて訳者によるものである。

3. 『エチカ』第1部定義2の吟味 (pp. 10-11)

《訳》

定義2

同じ本性をもつ他の事物によって限界づけられうる事物は、それ自体の類において

1 笠松和也「クリストフ・ヴィティヒ『アンチ・スピノザ』を読む(1)——訳と注解」『人文×社会』第5号、2022年、221-253頁。DOI: 10.50942/jinbunxshakai.2.5_221.

有限であると言われる。〔スピノザはこの定義を次の例で説明している。〕例えば、物体は有限だと言われる。なぜなら、それよりも大きい他の物体を、われわれは概念によって考えるからである。同様に、思惟は他の思惟によって限界づけられる。だが、物体は思惟によって限界づけられず、思惟も物体によって限界づけられない。

吟味

これもまた抽象的な術語の定義であり、この抽象概念がそこから由来したところの個物が認識される前には十分に知解されえない。そして、その抽象もまたきわめて一般的で錯雑としており、ここでの術語それ自体も、それが全く否定的な術語であると言わないならば、ひどく曖昧である。というのも、「有限である」[という語]は、一般的に言われるか、特殊的に用いられるかのどちらかだが、前者の場合はあらゆる完全性をもつわけではないものがそう言われるのであり、後者の場合はある何らかの完全性について、しかもそれがさらに制限・制約される時に用いられるからである。こうして、あらゆるものを知解するわけではない思惟は有限だということになる。また、このようにして、さらに延長することがないように何らかの尺度ないし限界によって限界づけられる物体は有限であると言われる。

しかし、彼 [=スピノザ] は、こうした曖昧さを触れないまま残しており、それゆえ定義された事柄も錯雑としたまま残している。この錯雑さは次の点において増大する。すなわち、彼 [=スピノザ] が「同じ本性をもつ他の事物によって限界づけられる」と言うのではなく、「限界づけられうる」と言っている点である。というのも、「有限である」とは、限界づけられうるのではなく、限界づけられていることだからである。彼 [=スピノザ] がもちだす「思惟」の例は、全面的にはこの定義に適合しない。というのも、思惟であるかぎりの思惟は、限界や終端を含まないからである。ゆえに、思惟は必然的に他の思惟によって限界づけられるわけではない。というのも、あらゆる思惟可能な諸事物を汲みつくし、その諸事物をこのうえなく完全に知得して、それらについてこのうえなく自由に判断するようなそうした思惟を思い浮かべるならば、それは他の思惟によって限界づけられないだろう。というのも、何であれ他の思惟によって構想されるものは、すでにその当の思惟のうちに含まれているからである。しかし、あらゆる思惟可能なものを汲みつくすのではなく、それゆえ後に続く他の思惟から区別されるはずであるそうした思惟は、有限である。その当の思惟は、後に続く思惟によって、思惟可能な他のもの、ないし他の思惟の形相を、思惟可能なものとして把握するのである。このようにして、彼 [=スピノザ] は、神をあらゆる他の思惟する諸事物から最大限に区別していたはずである。

その後、彼 [=スピノザ] はこう述べている。「だが、物体は思惟によって限界づけられず、思惟も物体によって限界づけられない」。これは、絶対的に真であるわけではない。思惟のうちで端的に完全性であるもの、ないし彼 [=スピノザ] が用いる言い方であれば、思惟のうちでそれ自体の類において完全性であるものとしてのそうした完全性を物体がもたないかぎりにおいて、物体は思惟によって限界づけられると言われうる。同様の理由により、物体がもつ完全性を思惟がもたないかぎりにおいて、思惟もまた物体によって限界づけられると言われうる。もっとも、それは無限な思惟には拡張されるべきではないが。無限な思惟は、たとえ延長をもたないとしても、端的にあらゆる無限な完全性をもっている。すなわち、無限な思惟は、被造物における完全性に属するあらゆるものを優越的に含んでいる、ないしはあらゆる被造物がもつあらゆる完全性よりも遠大なものを含んでいるということである。

だが、思惟に関して言えば、思惟は延長をもたないとしても、物体よりもはるかに完全である。というのも、いかなる延長的な物体も、自らに由来して活動をもつことはなく、もし運動のような活動をもっているとするれば、外からそうした活動を受け取っているのであるが、これに対して精神は、自己自身に由来して、それによって精神が存在するようなそうした思惟する活動をもっているので、精神の完全性は延長の完全性よりもはるかに大きいからである。

《注解》

ヴィティヒの批判は、次の一文から始まる。「これもまた抽象的な術語の定義であり、この抽象概念がそこから由来したところの個物が認識される前には十分に知解されえない」。これは、「論証する方法について」や第1部定義1の吟味において見られた第二概念批判と同じものである。その第二概念批判においても、個物を把握する第一概念に先立って、その第一概念から作り出された第二概念を考察してはならないという批判がなされていた。ここでは、その第二概念が「抽象概念 (notio abstracta)」と呼び直された上で、これまでの第二概念批判と同様に、個物の把握に先立って「有限である」という語を定義しても空虚であると批判されている。

次いで、「有限である」という語は二つの仕方で行われると指摘される。すなわち、(a) 一般的に言われるか、(b) 特殊的に言われるか、のどちらかである。(a) の場合は、あらゆる完全性をもつわけではないものについて言われる。例えば、あらゆるものを知解するわけではない思惟が「有限な思惟」と言われるのは、(a) の用法である。他方、(b) の場合は、ある特定の何らかの完全性が制限・制約されているものについて言われる。例えば、延長という点において、ある一定の大きさに定められて

いる物体が「有限な物体」と言われるのは、(b)の用法である。ヴィティヒの見たところ、これら二つの用法は区別して考察される必要があるが、スピノザはこれらを混同してしまっている。

さらに、ヴィティヒは定義2で用いられている「限界づけられうる (terminari potest)」という語に着目し、ここに曖昧さが含まれていると指摘する。というのも、「有限である」とは、限界づけられる可能性をもっていることではなく、現に限界づけられていることを意味するはずだからである。その点で、「限界づけられる (terminari)」と言うべきである。

以上は定義2の1文目に対する批判である。これに続けて、ヴィティヒは物体と思惟の例を吟味する。そこで問題となるのは、次の二つの規定、すなわち(1)「思惟は他の思惟によって限界づけられる」という規定と、(2)「物体は思惟によって限界づけられず、思惟も物体によって限界づけられない」という規定である。

(1)の規定については、ヴィティヒは当てはまらない場合があると指摘する。というのも、「思惟であるかぎりの思惟」、すなわち「あらゆる思惟可能な諸事物を汲みつくし、その諸事物をこのうえなく完全に知得して、それらについてこのうえなく自由に判断するようなそうした思惟」を想定することができるからである。こうした思惟は、いかなる他の思惟によっても限界づけられることがない無限な思惟である。それゆえ、「思惟は他の思惟によって限界づけられる」という規定は、ある特定の事物を知得するだけの有限な思惟にしか適用できない。

(2)の規定についても、ヴィティヒによれば、絶対的に真であるわけではない。なぜなら、いかなる物体も全知という完全性をもたないように、物体は思惟がそれ自体の類においてもつ完全性をもたないという点で、限界をもっていると言うことができるからである。この意味においては、「物体は思惟によって限界づけられる」と言えなくもない。これと同様に、「思惟は物体によって限界づけられる」と言える場面もあるはずである。

ただし、この(2)の規定に対する批判には、二つの補足が加えられる。

第一に、無限な思惟に関しては、「限界づけられない」という点において「無限である」と言われるため、いかなる他の思惟によっても限界づけられないのと同様に、いかなる物体によっても限界づけられない。

第二に、思惟は物体がそれ自体の類においてもつ完全性をもたないとしても、物体よりもはるかに完全である。というのも、思惟は「自らに由来して (a se)」活動しうることに対して、物体は常に外的原因によって活動させられるからである。この点で、思惟は常に物体にはない完全性をもっていると言える。

4. 『エチカ』第1部定義3の吟味 (pp. 11-15)

《訳》

定義3

実体とは、自らにおいて存在し、自らによって思い抱かれるものである。言い換えれば、それについて思い抱かれたものが、そこからその当のものが形成されるはずであるところの他の事物について思い抱かれたものを必要としないそうしたものである。

吟味

定義1に対してわれわれが注記したことを著者が冒していることから、ここにも同じ錯誤が見て取れる。そのわれわれが注記したこととは、個物が知解されるよりも前に、個物から抽象された第二概念が考察されているということであった。こうした仕方で、われわれは事物の前にある蔽いを掴み取って、人間の思惟に影響力を及ぼしてしまうのである。なぜなら、あらゆる人間は、現に存在するもののうちで「実体」とは、神、精神、物体といった個物のことであると知解し、その個物において事象的であるものを考察することで、神においては無限な思惟、精神においては有限な思惟、物体においては延長というものを案出するからである。

だが、もし哲学者が今このことを自らの精神の上で反省・思惟し、事象的で現に存在するこれらすべて、すなわち無限な思惟、有限な思惟、延長に気づくのであれば、それらが自らによって別個に知解され、そのうちにそれが帰されうるところのいかなるものも残らないような仕方で表象されるということを見いだすであろう。そして、これらのみが基に存立する (subsistere) 事物の充実な形相をもっていると見いだすが、それを「実体 (substantia)」と呼び、「実体」という抽象された概念を形成するであろう。すなわち、実体とは、自らによって別個に知解され、さらにそのうちにそれが帰されうるところのいかなるものも残らないような仕方で自らによってあるそうした事物である。

しかし、この「実体」の概念は、上述のことから明らかなように、こうした諸々の個物のうちの一つ一つのものに精神が反省を加えないかぎり、十分明晰に知解されない。われわれの精神が力を失い、実在する事物の代わりにこの「実体」の概念それ自体をもち、そうして物体の前にある蔽いを掴み取ってしまわないように、何らかの個物がその「実体」の概念とともに、われわれの精神に思い浮かばなければならないのである。このように、厳密に言われる意味での「実体」の概念は、正当に抽象された

ものであり、上述の仕方に応じて知解されることになる。そして、後から把握された「実体」からは正しく区別されることになる。実際、これらはそれぞれ、後から把握された「実体」と混同されるのが常である。というのも、何らかの事物は、神、精神、物体のように、真にして自らによってあるか、それとも四角形や運動等のように、何らか一定の形相、規定、本性、本質をもつかぎりにおいて、単にわれわれが考察するための様態としてあるかのどちらかである。こうした形相、規定、本性、本質は、後から把握された「実体」と同等のものであり、それゆえ後から把握された「実体」は、何らかの事物の本質、アリストテレスのいうウーシア、形相、本性と同じものだということになる。この観点からすれば、一つの同じ事物がかたや実体と言われ、かたや偶有性とも呼ばれうるのである。この意味で、形状は後から把握された「実体」である一方で、厳密に把握された「実体」と比較される場合には、偶有性と言われなければならない。

しかし、スピノザが後に、「実体はただ一つであり、神である」「他のあらゆるものはその実体の様態にすぎない」と結論づけるという目的に向かって、「実体」の定義が導入されているとすれば、間違いなくスピノザはここで厳密に言われる意味での「実体」を定義しようとしている。だが、ここですべき価値があるのは、われわれがいっそう判明にこうした事物を知解し、実体である当の事物から「実体」の概念を区別するために、この抽象の起源とその抽象されたものをもたらず名称に注目することである。語源に注目するならば、「実体 (substantia)」[という語]は、自らによって成立しているという意味の「存立する (stare)」と前置詞の「～の下に (sub)」に由来して言われる。こうして、「実体」[という語]は、実体が自らによって成立し、かつ他のものの基体であるということを意味する。そうした他のものとは、自らによって存立せず、それゆえ偶有性と呼ばれるものである。

他方、実体とは「自らによってあること (per se esse)」だと言われる場合には、この「あること (Esse)」とは何であるのかを厳密に説明しなければならない。ところで、「ある (Est)」という語は、われわれがその事柄に向かう際の第一にして最も単純な意味においては、先立って知解されていたと想定されるいかなるものも事物のうちに措定しない、そうした意志の最初の働き、すなわち肯定に他ならないということ、単に意味表示していると、ここで言わなければならない。このように意志は、知性が錯雑・不明瞭でない仕方で肯定されるべきものや認知されるべきものを提示していると、認知し把握するのである。こうして、そのうちに観念があるところの知性とは別に、知性が観念を把握していることを認知する意志の働きが出てくる。その意志の認知を、「ある (Est)」という語はまずもって意味している。

しかし、これはきわめて一般的で共通な事柄である。というのも、これは見かけの上であるものについても、思惟されたものについても、思惟の外に現に存在するものについても当てはまるからである。私が「熱がある (Calor est)」「痛みがある (Dolor est)」と言う場合のように、「ある」という語が] 思惟されたものや見かけの上であるものについて用いられる場合、その観念は自らの表象的存在において [= 自らが何かを表象しているものとしてあることにおいて] (in suo esse repraesentativo) というよりもむしろ、自らの現実的存在において [= 自らが現実的なものとしてあることにおいて] (in suo esse actuali) 考察されている。それはちょうど、私の精神のうちには何かがある、すなわち私の知性の働きがあり、この命題が意味をもつというようなものである。私が「痛み」や「熱」という名前と呼ぶ何かを私に表象するその観念は、実際に私の知性のうちにある。そうすると、その観念を知得する知性に対して、単にその知性の外ではなく、その知性そのものに関係づけられる意志が出てきて、単に知性が把握しているものをその知性のうちで認知するのである。

しかし、知性の外に現に存在するものについて用いられる場合、その観念は、表象された当の事物にしたがって想定されるかぎり、自己の表象的存在において [= 自らが何かを表象しているものとしてあることにおいて] 考察されている。例えば、私が「三角形がある (Triangulum est)」「物体がある (Corpus est)」と言う時、三角形や物体が思惟されたものの中にあることを単に意味しているのではなく、(思惟されたものの中にある三角形や物体の観念が、思惟の外にある何かを表象しているゆえに) 三角形や物体が思惟されたものの中にあること、すなわち現に存在するものにおいてあることを意味している。また、そこにおいて「ある (Est)」という語は、知性が表象したものを認知する意志の働きに他ならないものを意味しているが、その認知は知性に応じた実在の関係を伴ったものというよりも、むしろ知性の外にある実在の関係を伴ったものである。それゆえ、私が「三角形がある」「物体がある」と言う時、私は自らが知性のうちにもつ観念に、その知性のうちに存在する何かではなく、知性の外に存在する何かが実際に対応していることを意味している。

さて、知性の外に実在するものは、さらに次のように区別されることになる。すなわち、一方はわれわれがそれについて「自らによってある (esse per se)」と言うことができるように、観念が表象するものである。他方はそれが「他のものにおいてある (esse in alio)」とわれわれが言うことができるように、観念が表象するものである。「自らによってある」ものとは、すなわち厳密に言われる意味での「実体」の本性を構成しているものであり、「他のものにおいてある」ことは、後から把握された「実体」において成立しうる。ゆえに、何かは他のものにおいてでなく、自らにおい

であり、それゆえ基体としての他のものに依存していない仕方で、知性の外に実在している場合には、それは「自らによってある」と言われる。このように、「自らによってある」ものは、他のものにおいてあることはなく、その結果として他のもの由来してあることも、基体としての他のものに依存することもない。そうしたものは、*αὐθυπαρξία* [=自存するもの] と呼ばれうる。

しかし、「[実体]の意味は」それ以上に引き延ばされるべきではない。実体とは原因としての他のものに依存しないものであるといった「実体」の概念まで求めるようなことをしてはならないのである。だが、スピノザはこの意味において、自らの「実体」の定義を捉えている。このことは、スピノザが続く箇所において、神のみが実体であり、被造物はその実体の何らかの様態にすぎないと結論づけようとしていることから明らかである。また、『知性改善論』の386頁²に次のように書かれていることから明らかである。「もし事物が自らにおいてある、ないしは人々が言うように自己原因であるとすれば、その事物はそれ自身の本質のみによって知解されなければならない。他方、もし事物が自らにおいてあるのではなく、実在するための原因を必要とするのであれば、その事物はそれ自身の直近の原因によって知解されなければならない」³。しかし、この一節で「自らにおいてある」と「自らによってある」という表現を、他の人々が通常用いないような全く異なる意味へと引き延ばすのは、正当ではない。

少なくとも、知性の外に実在する事物は、(a) 他のものにおいてあるという仕方であるか、(b) 基体としての他のものにおいてあるのではなくそれ自体においてあるか、(c) 実在するためにいかなる外的原因も必要とせず、それ自身にとってその本性と全力能で実在するには十分であるという仕方であるのか、のいずれかである。これら三つは、まさに事物の本性にしたがって区別される。したがって、第一の場合が第二の場合と混同されてはならないように、第三の場合も第二の場合と混同されてはならない。だが、スピノザはそれをしてしまっているのである。第一の場合には、通常「偶有性」と言われるもので、第二の場合には「実体」である。第三の場合には、非被造的で非依存的な実体という名称で指し示され、被造的な実体とは区別されなければならないものである。ゆえに、スピノザのいう「実体」の観念は、間違いなく仮構された観念 (*idea ficta*) であり、『知性改善論』において論究されたことにしたがえば、それは真ではないことになる。それゆえ、「実体」の定義それ自体も、スピノザのい

2 『ラテン語版スピノザ遺稿集 (*Opera Posthuma*)』の頁数。

3 TIE, § 92.

う意味で把握されるならば、真なる観念を表現していないことになり、したがってその定義それ自体も真ではないことになる。

そうであれば、この定義は、われわれが諸々の論証や、事物のうちに見いだされるさまざまな真理からなる構築物を打ち立てる上での原理や基礎になるであろうか。論証する方法についての序文でわれわれが見たように、スピノザによれば、真なる定義は規定された対象をもたなければならない。もし誰かが何らかの語によって、共通の用法から逸れるような何かを解していると言うならば、それは不十分である。というのも、実際に自然のうちにある諸事物について論じる時に、人々が通常その諸事物を表現し指し示す語によって、理性を用いるすべての人がそれとは異なると通常解する何かを解するということはしてはならないからである。もっとも、世界のうちにある諸事物についてではなく、自らの脳が作り出した虚構について甘美に哲学をする人々、あるいは妄想に憑りつかれている人々のうちに自分がいると思われたのであれば別であるが。

《注解》

ヴィティヒは、定義3についてもスピノザは第一概念と第二概念の順序を顛倒させていると指摘した上で、(A) 本来「実体」はどのような仕方で定義すべきか、(B) 『エチカ』における「実体」の定義にはいかなる難点が含まれているかを示している。

(A) に関しては、まず哲学者たちが現に存在する個物から抽象するであろう「実体」の概念に着目し、それによって表される「実体」の定義を提示する。すなわち、「実体とは、自らによって別個に知解され、さらにそのうちにそれが帰されるところのいかなるものも残らないような仕方で自らによってあるそうした事物である」。だが、ヴィティヒによれば、個物を認識するのに先立って、この定義のみから実体を把握しようとしても、実体は十分明晰には知解されない。というのも、この定義によって表される「実体」の概念はあくまで第二概念であり、個物の認識から生じる第一概念に依拠したものだからである。それゆえ、まず個物を認識し、それに伴う仕方でのみ「実体」の概念は把握されるべきである。こうした「実体」が、「厳密に把握された実体 (*substantia stricte accepta*)」と呼ばれ、他方で個物の認識から切り離されて、そのみで捉えられた「実体」が、「後から把握された実体 (*substantia late accepta*)」と呼ばれる。この区分にしたがえば、スピノザがここで定義しようとしているのは、明らかに前者の「厳密に把握された実体」である。

では、「厳密に把握された実体」はどのような仕方で定義すべきなのだろうか。ヴィティヒはまず、「実体 (*substantia*)」という語そのものが、「存立する」を意味する

動詞 stare と「～の下に」を意味する前置詞 sub に由来することに注目する。このことから、実体とは「自らによって成立し、かつ他のものの基体であるもの」を意味すると予想される。

これに続いて、ヴィティヒは、上述の「実体」の定義に含まれていた「自らによってある (per se esse)」という表現における「ある (esse)」の意味を問題にする。まず、「ある」という語は、「物体がある (Corpus est)」と言えるのと同様に、「熱がある (Calor est)」や「痛みがある (Dolor est)」と言えることから、実在する個物だけでなく、それに属する性質（偶有性）にも適用できることが分かる。この意味での「ある」は、「先立って知解されていたと想定されるいかなるものも事物のうちに指定しない、そうした意志の最初の働き、すなわち肯定」を表している。これにより、「意志は、知性が錯雑・不明瞭でない仕方で肯定されるべきものや認知されるべきものを提示していると、認知し把握する」とされる。つまり、「ある」が表しているのは、知性が確かにその対象を提示していると最初に肯定し認知する意志の働きなのである。

しかし、これは最も一般的な意味における「ある」であり、見かけの上であるものにも、思惟されたものにも、知性の外に実在するものにも当てはまる。そこで、ヴィティヒはさらに (a) 見かけの上であるものや思惟されたものの場合と (b) 知性の外に実在するものの場合に分けて、それぞれの「ある」の意味を考察する。

(a) 見かけの上であるものや思惟されたものの場合とは、「熱がある (Calor est)」や「痛みがある (Dolor est)」と言うような場合である。この場合、これらの文が表しているのは、私の知性がもつ観念が、私の知性の外に実在する「熱」や「痛み」という事物を表象しているということよりもむしろ、「熱」や「痛み」と私が呼ぶ何かを表象する観念が、現実に私の知性のうちに存在し、それゆえこの命題が意味をなすということである。この意味において、「その観念は自らの表象的存在において [=自らが何かを表象しているものとしてあることにおいて] (in suo esse repraesentativo) ではなく、自らの現実的存在において [=自らが現実的なものとしてあることにおいて] (in suo esse actuali) 考察されている」。したがって、この場合の「ある」は、前述したように、知性の対象を肯定し認知する意志の最初の働きを表している。

(b) 知性の外に実在するものの場合とは、「三角形がある (Triangulum est)」や「物体がある (Corpus est)」と言うような場合である。この場合、これらの文は、単に「三角形」や「物体」の観念が、現実に私の知性のうちに存在し、それゆえこの命題が意味をなすということだけを表しているのではなく、それらの観念が私の知性の

外に実在する「三角形」や「物体」を表象していることも表している。この意味において、その観念は自らの現実的存在において [=自らが現実的なものとしてあることにおいて] だけでなく、自らの表象的存在において [=自らが何かを表象しているものとしてあることにおいて] も考察されている。したがって、この場合の「ある」は、知性の対象を肯定し認知する意志の最初の働きとともに、知性の外にその対象が実在していることも表している。

この (b) の場合の「ある」は、さらに二つの区分される。それが、(α)「自らによってある (esse per se)」と (β)「他のものにおいてある (esse in alio)」である。(α) は基体としての他のものに依存しない「ある」を表しているため、「厳密に把握された実体」に対応する。他方、(β) は基体としての他のものに依存する「ある」を表しているため、「後から把握された実体」に対応する。「実体」の定義に含まれていた「自らによってある」という規定は、ここで登場するのである。

以上を踏まえて、ヴィティヒは (B) の論点、すなわち『エチカ』における「実体」の定義にはいかなる難点が含まれているかを提示する。そこで問題となるのは、スピノザが上述の「実体」の定義に、さらに「実体とは原因としての他のものに依存しないものである」という規定を付け加えていることである。そこでは、本来「実体」の定義には含意されないはずである原因性を、実体の定義のうち書き加えてしまっている。ヴィティヒの見るところ、こうした混乱によって、自己原因である神のみが実体であり、原因としての神に依存するあらゆる被造物は実体ではなく様態であるという結論が導き出されるのである。

しかし、神と被造物の区別は、「実体」の定義のうちに見いだされるべきものではない。実際、知性の外に実在する事物には、(a) 他のものにおいてあるという仕方であるか、(b) 基体としての他のものにおいてあるのではなくそれ自体においてあるか、(c) 実在するためにいかなる外的原因も必要とせず、それ自身にとってその本性と全力能で実在するのには十分であるという仕方であるのか、の三つの場合がある。(a) は偶有性、(b) は被造物、(c) は神であるが、(b) と (c) はともに「他のものにおいてある」のではない、すなわち何らかの基体のうちにあるのではないという点で、実体と呼ばれるべきである。スピノザは「実体」の定義に原因性をもちこんだために、こうした区別を混同してしまったのである。これにより、『エチカ』における「実体」の定義は、われわれが共通に「実体」と呼ぶものを指さないことになる。それゆえ、ヴィティヒに言わせれば、スピノザのいう「実体」は、現に実在する事物を指示しない観念であり、まさに『知性改善論』で言われるところの「仮構された観念」に他ならないのである。

5. 『エチカ』第1部定義4の吟味 (pp. 15-16)

《訳》

定義4

属性とは、知性が実体についてその本質を構成するものとして知得するものであると解する。

吟味

「属性」という語は、この定義によって狭められるべきであるよりも、あるいは狭められうるよりも、いっそう広範に及ぶ。それは、次のような場合には「偶有性」という語と同等である。すなわち、その場合とは、偶有性が実体と対立するものとして論理的な意味で考えられる場合である。その意味において、実体は「諸々の偶有性の基に存立する (*substare accidentibus*)」と言われる。つまり、実体がその諸々の偶有性の下でそれらを支えて維持しながら存立するように、諸々の偶有性はあたかも土台や台座の上に存立するかのよう、実体の上に存立するのである。

このような偶有性ないし属性には、二つの種類がある。一つは、真にして事象的な (*vera & realia*) 偶有性ないし属性である。もう一つは、それが属する基体が単に指定されているだけである偶有性ないし属性である。後者の場合、そうした偶有性ないし属性は、実際にはその基体のうちにあるのではなく、単に見かけの上で (*in apparentibus*) あるか、思惟されたものの中に (*in cogitatis*) あるかのどちらかである。

見かけの上であるものとは、例えば痛みや熱などのように、われわれの身体やその他の物体のうちにあるように思われるものの、われわれの感官による知覚においてのみあるものである。思惟されたものの中にあるものとは、考察するためのさまざまな様態であり、事物のうちにあるのではなく、われわれの思惟のうちのみある名称を、われわれがしばしばその事物に課すゆえに、しばしば錯誤によってあたかも事物のうちに見取られ、その事物について肯定されるものである。こうした考察するための様態は、一定数にとどまるものではありえない。ここには、まず諸事物の最高類や諸事物の状態として観られるかぎりにおいて、論理学や形而上学のあらゆる諸概念が観て取られる。次いで、あらゆる諸関係が観て取られる。それは、考察するための様態が、指示対象の個物の中に基礎をもつにせよ、その様態が属するとわれわれが指示するこのわれわれの側のものと比較される他の諸事物のうち基礎をもつにせよ、そうなのである。

真にして事象的な属性に関しては、さらに次のように分割されるべきである。すなわち、一つは本質的属性 (*attributa essentialia*) であり、それには任意の実体のうちで、その実体を構成し、他の実体からその実体を区別するものがただ一つだけ属する。他方、もう一つは様態 (*modi*) であり、それによって実体がそれぞれの状態になるものである。

だが、こうした事象的な属性は、それが帰せられる基体ゆえに、実体についての何らかの概念を常に含んでいるという共通点をさらにもっている。というのも、一方で実体が基体として、他方で属性がその実体に内属する述語として考えられるものの、実際には実体と属性が相互交換可能という点で同じである場合、本質的属性は実体そのものであり、論理的にしか実体から区別されない。他方、たとえ実体がこれこれの様態なしに知解されうるとしても、そしてそれゆえ様態は実体と相互交換可能でないとしても、様態はそれが思い抱かれるとそのうちに、実体についての何らかのものを含んでおり、それが帰される実体なしには思い抱かれることも知解されることもありえないのである。

《注解》

ヴィティヒは、定義4で示される「属性」の定義が、「属性」という語の一般的な用法よりも不当に狭められたものであると指摘する。そのうえで、「属性」は一般に、論理的な意味において実体と対立するものとして、「偶有性」と同義で用いられると述べる。おそらくヴィティヒは、定義3で示される「実体」の定義との対比からいって、ここで定義されるべき「属性」はこの意味での「属性」でなければならないと考えている。

このように偶有性と同義で考えられる意味での「属性」は、ヴィティヒによれば、2種類に大別できる。すなわち、(a) 真にして事象的な属性 (*attributa vera et realia*) と (b) それが属する基体が単に指定されているだけである属性である。

このうち、(b) はさらに (α) 単に見かけの上で (*in apparentibus*) ある場合と、(β) 思惟されたもののうちに (*in cogitatis*) ある場合の2種類に分かれる。(α) は、熱や痛みのように、一見するとわれわれの知性の外に実在する事物に属する性質であるかのように見えるものの、実際はわれわれの感官による知覚のうちのみ存在するような属性の場合である。他方、(β) は「考察するための様態 (*modi considerandi*)」である。これには、諸事物の最高類や諸事物の状態を表す論理学や形而上学のあらゆる諸概念のほか、諸事物どうしのあらゆる諸関係が含まれている。例えば、「基体」「偶有性」「原因」「結果」「質」「量」といった諸概念が挙げられる。

こうした考察するための様態は、しばしば諸事物がもつ性質だと錯誤され、諸事物それ自体に帰されることがある。

また、(a) 真にして事象的な属性も、さらに (α) 本質的属性 (attributa essentialia) と (β) 様態 (modi) に分類される。このうち、(α) 本質的属性とは、実体を構成し、かつその実体を他の実体から区別するような属性であり、実体ごとにただ一つしかない。それゆえ、これは実体と相互交換可能であり、実体とは論理的にしか区別されない。他方、(β) 様態とは、本質的属性以外の真にして事象的な属性であり、実体のさまざまな状態を表している。これは実体と相互交換可能ではない。もっとも、両者とも実体を基体としてもち、その実体に帰される述語として表される。この点で、「実体についての何らかの概念を常に含んでいるという共通点」をもっている。

このように、ヴィティヒは、「属性」の定義がこれら四つの種類の属性をすべて含むものでなければならないと考えている。だが、ここでスピノザが示す定義4には、「実体についてその本質を構成するもの」という表現が含まれている。そのことから、この定義は本質的属性にしか当てはまらないように思われる。ヴィティヒが問題にしているのは、おそらくこのことであろう。

6. 『エチカ』第1部定義5の吟味 (p. 16)

《訳》

定義5

様態とは、実体の変状、ないしは他のものにおいて存在し、かつその他のものによって思い抱かれるそうしたものであると解する。

吟味

前定義 [=定義4] に対して私が注記したことから、次のことが容易に明らかである。すなわち、これは様態の正当な定義ではなく、この定義が適用されうるという点で、本質的属性と全く混同されているということである。

《注解》

定義4の吟味で示されたように、ヴィティヒによれば、様態とは本質的属性以外の真にして事象的な属性である。だが、この定義5は本質的属性にも当てはまってしまう。その点で、この定義は本質的属性から様態を区別し、様態のみに当てはまるような正当な定義ではない。

翻訳箇所 of 原文

〔凡例〕

- / / で囲まれた数字は原文のページ数を示す。
- [] は原文の誤字・脱字と思われるものを修正した箇所を示す。
- イタリック、大文字・小文字の区別、段落区切りは、原文のままとした。

3. 『エチカ』第1部定義2の吟味 (pp. 10–11)

/10/

DEFINITIO II.

Ea res dicitur in suo genere finita, quae alia ejusdem naturae terminari potest. Explicat Spinoza istam Definitionem exemplis. Ex. Gr. corpus dicitur finitum, quia aliud semper majus concipimus. Sic cogitatio alia cogitatione terminatur. At corpus non terminatur cogitatione, nec cogitatio corpore.

EXAMEN.

HÆc Definitio iterum est termini abstracti, qui non satis potest intelligi antequam cognoscantur particularia, a quibus ista notio abstracta fuit. Et abstractio quoque ista nimis est generalis & confusa, atque hic ipse terminus valde ambiguus, ne nunc dicam quod sit terminus plane negativus. Finitum enim dicitur vel generatim id, quod non habet omnem perfectionem, vel usurpatur speciatim de certa quadam perfectione, quae ipsa etiam adhuc limitata est & restricta. Sic datur finita cogitatio, quae non omnia intelligit; ita finitum dicitur corpus, quod certa mensura sive terminis terminatur, ut ulterius se non extendat. Sed ille hanc ambiguitatem relinquit intactam adeoque rem definitam relinquit obscuram. Quae obscuritas augetur, quod non dicat *quae alia ejusdem naturae terminatur, sed terminari potest*. Finitum enim est, non quod terminari potest, sed quod terminatum est. Exemplum *Cogitationis*, quod affert, non omnino quadrat definitioni. Cogitatio enim quae cogitatio est, non involvit terminum seu finem; ergo non necessario cogitatio alia cogitatione terminatur. Si enim concipiatur cogitatio, quae omnes res cognoscibiles exhauriat, easque perfectissime percipiat atque de iis statuatur liberrime ea non terminabitur alia cogitatione; quaecumque enim alia fingatur, ea jam continetur in illa.

Sed cogitatio finita est, quae non exhaurit omnia cognoscibilia, & propterea ab alia sequente distingui debet, qua iterum aliud quod cognoscib[i]le /11/ vel aliam formam istius, cognoscibilis apprehendit. Sic optime Deum distinxisset a rebus quibusvis aliis cogitantibus. Quod postea dicit : *At corpus non terminatur cogitatione, nec cogitatio corpore*, id non absolute verum est. Potest dici corpus terminari cogitatione quatenus corpus non habet eam perfectionem, quae est in cogitatione quae tamen simpliciter est perfectio, sive in suo genere, qua phrasi ipse utitur; simili ratione quoque potest dici cogitationem terminari corpore, quatenus cogitatio non habet eam perfectionem, quam habet corpus; quamvis id non debeat extendi ad cogitationem infinitam, quae etsi non habeat extensionem habet tamen simpliciter omnem eamque infinitam perfectionem, quod ea eminenter contineat omne id, quod est perfectionis in rebus creatis, sive, quod ea contineat id, quod longe quid majus est, quam omnis perfectio omnium rerum creatarum. Quod vero attinet ad cogitationem ea tamen longe perfectior est corpore etsi non habeat extensionem, corpus enim extensum nullum ex se habet actum, sed si quem habeat, cujusmodi est motus, eum extrinsecus accipit, at mens actum cogitandi ex semetipsa, eo quod mens est, habet, quae longe major est perfectio, quam extensionis.

4. 『エチカ』 第 1 部定義 3 の吟味 (pp. 11–15)

/11/

DEFINITIO III.

Per Substantiam intelligo id quod in se est & per se concipitur; hoc est id, cujus conceptus non indiget conceptu alterius rei, a quo formari debet.

EXAMEN.

Vitium idem hic observare licet ab auctore commissum, quod ad definitionem I notavimus scilicet, notionem secundam considerari abstractam a suis particularibus, antequam illa particularia fuerint intellecta, quo modo agendi fit, ut umbram captemus pro re & vim faciamus humanae cogitationi, quia omnes homines per substantiam in extantibus rem particularem intelligunt, Deum, Mentem, Corpus, in his particularibus considerantes id, quod reale /12/ est, inveniunt in Deo cogitationem infinitam, in mente cogitationem finitam, in corpore extensionem. Quod si jam

Phi[lo]sophus super his animum reflectat & cogitet, ac haec omnia, cogitationem infinitam, cogitationem finitam & extensionem, quae realia sunt & extantia, animadvertat, ita per se & seorsim intelligi, & in idea repraesentari, ut in illis non supersit quicquam quo referri possint, deprehendet, haec sola rei subsistentis plenam formam habere, atque sic substantias appellabit & notionem substantiae sic abstractam formabit, quod sit *Res, quae per se & seorsim intelligitur, atque ideo per se est ut in illa non supersit quicquam, quo referri queat*; quae tamen notio, uti apparet ex dictis, non intelligitur satis clare, nisi mente reflexa ad unum vel alterum ex illis particularibus. Debet aliquod particulare una cum ista notione mentem nostram subire, ne mens nostra evanescat & illam ipsam notionem pro re existente habeat, sicque umbram pro corpore captet. Atque sic notio substantiae stricte dictae legitime erit abstracta & commode hoc dicto modo intelligetur, atque a substantia late accepta recte distinguetur: Solet enim haec alias confundi cum substantia late accepta. Res enim aliqua vel vere est per se, uti Deus, Mens, Corpus, vel nostro tantum considerandi modo, ut figura quadrata, motus &c. quatenus habent aliquam certam formam, rationem[,] naturam, essentiam, quae aequipolle[n]t substantiae late acceptae, adeo ut substantia late accepta idem sit quod rei alicujus essentia, οὐσίαν Aristoteles dixit, forma, natura. Atque hac ratione una eademque res potest substantia dici, potest etiam accidens appellari. Sic figura est substantia late accepta, accidens autem debet dici, si cum substantia stricte accepta comparetur. At cum haec definitio a Spinoza in eum finem sit adducta, ut conficeret postea, unam tantum esse substantiam, Deum; reliqua omnia esse tantum modos illius substantiae, voluit procul dubio substantiam stricte dictam hic definire. Hic vero operae pretium fuerit, ut rem istam magis distincte intelligamus, atque notionem substantiae a re, quae est substantia, distinguamus, attendere ad originem istius abstractionis & nomen quo illud abstractum effertur. Substantia, si ad originem vocis attendas, dicitur a *stare*, quod est per se consistere, & a praepositione *sub*, atque ita significat, eam & per se consistere, & subjectum esse alterius, quod ita per se non stat, & propterea accidens appellatur. /13/ Cum autem substantia dicatur *per se esse* illud *Esse* quid sit rite evolendum. Dicendum autem hic est, verbum *Est*, in prima & simplicissima sua significatione significare tantum, quo animo simus affecti erga istam rem, ut nihil aliud sit quam primus voluntatis actus sive affirmatio, quae nihil ponit in re, quod non prius supponatur fuisse intellectum. Ita voluntas agnoscit & amplectitur hoc, quod intellectus sine confusione & obscuritate affirmandum & agnoscendum proponit. Sic praeter

intellectum in quo est idea, accedit actus voluntatis, quo illud, quod intellectus in idea deprehendit, agnoscit, quam agnitionem voluntatis primo significat verbum *Est*. Sed hoc admodum generale est & commune, usurpatur enim & de apparentibus, & de cogitatis, & de extantibus extra cogitationem. Quando de cogitatis & apparentibus adhibetur, ut quando dico *Calor est, Dolor est*, consideratur idea in suo esse actuali potius quam repraesentativo, prout est aliquid in mea mente, prout est actus mei intellectus, atque harum Propositionum sensus est. Illa idea, quae mihi repraesentat aliquid, quod vel doloris vel caloris nomine appello, revera est in meo intellectu; adeo ut tunc intellectui, quo percipitur ista idea, tantum accedat voluntas, quae ad illum ipsum intellectum & non extra eum refertur, atque in illo ipso intellectu id tantum agnoscit, quod intellectus apprehendit. Sed quando de extantibus extra intellectum usurpatur, idea consideratur in suo esse repraesentativo, & quatenus supponitur pro ipsa re repraesentata, ut dum dico, *Triangulum est, Corpus est*, non tantum significatur, triangulum vel corpus esse in cogitatis, sed praeterea, (quoniam idea trianguli & corporis, quae est in cogitatis repraesentat aliquid extra cogitationem) triangulum vel corpus esse extra cogitata, esse in extantibus. Atque ibi etiam verbum *Est* nihil quidem aliud significat, quam actum voluntatis, qua agnoscitur id, quod intellectus repraesentavit, sed agnoscitur non tam cum illa relatione existentiae ad intellectum, quam cum relatione existentiae extra illum, atque ita, quando dico, triangulum est, corpus est, significo, revera illi ideae, quam habeo in intellectu, non aliquid in ipso intellectu, extans respondere, sed aliquid extra intellectum. Nunc autem illud existens extra intellectum iterum distinguendum venit; aliud enim idea repraesentat tanquam tale, ut de eo possimus dicere *esse per se*, aliud vero tanquam tale, ut dicere queamus, illud *esse in alio*, /14/ atque illud *esse per se*, id est, quod naturam substantiae stricte dictae constituit, cum *esse in alio* possit locum habere in substantia late accepta. Quando ergo aliquid ita existit extra intellectum, ut sit in se & non in alio, adeoque ab alio tanquam, a subjecto non dependeat, dicitur illud *esse per se*. Sic vero quod *per se est* non est in alio, ut nec ab alio sit nec ab eo tanquam subjecto dependeat, quod αὐθπαρξία dici potest: Quod tamen non ulterius est trahendum, quasi ad substantiae conceptum requiratur, ut dependeat ab alio tanquam a causa, quo sensu Spinozam hanc definitionem suam accipere, tum ex eo patet, quod conficere conetur in sequentibus Deum solum esse Substantiam, res vero creatas tantum esse istius substantiae quosdam modos, tum ex iis quae legimus in Tractatu de Emendatione intellectus p. 386. *Si res sit in se, sive ut vulgo dicitur, causa*

sui tum per solam suam essentiam debet intelligi, si vero res non sit in se, sed requirat causam ut existat, tum per proximam suam causam debet intelligi. Sed fas non erat ipsi phrasin illam *in se & per se esse* trahere in sensum plane alium, quo sensu ab aliis usurpari non solet. Saltem ea, quae sunt extra intellectum res extantes, vel talia sunt ut sint in alio, vel ut non sint in alio tanquam subjecto sed sint in semetipsis, vel ita sunt, ut nulla causa extrinseca ad existendum indigeant, sed sua natura & summa potentia ad existendum sibi ipsis sufficiant. Haec tria sane ex natura rei distinguuntur, & per consequens, sicut primum non secundo, ita nec tertium cum secundo debet confundi, contra quam fit a Spinoza. Prius est id quod accidens solet dici, alterum est substantia, tertium substantiae increatae & independentis nomine insigniri, neque cum substantiis creatis confundi debet. Ficta ergo procul dubio est idea substantiae, quam habet Spinoza, quae proin juxta ea, quae de ideis philosophatur Tract. de *Emendatione Intellectus*, vera non erit, adeoque ipsa definitio substantiae sensu Spinozae accepta non exprimet veram ideam, & per consequens illa ipsa definitio vera non erit. *Eane* ergo erit principium & fundamentum, cui illam structuram demonstrationum & variarum veritatum quae in rebus reperiuntur superaedificemus? Vera definitio juxta ipsum, uti vidimus in praefatione de methodo demonstrandi, debet habere determinatum objectum, neque sufficit, si quis dicat, se per aliquam vocem tale quid intelligere, quod recedit a communi usu. Neque enim licet, quando de rebus, quae revera sunt in rerum natura /15/ agitur, per voces, quibus illae res vulgo exprimi & significari solent, aliquid aliud, quam solent omnes homines ratione utentes, intelligere, nisi quis velit censeri inter eos homines, qui non de rebus, quae sunt in mundo, sed de sui cerebri figmentis suaviter philosophantur, sive delirant.

5. 『エチカ』 第1部定義4の吟味 (pp. 15–16)

/15/

DEFINITIO IV.

Per Attributum intelligo id, quod intellectus de substantia percipit tanquam ejusdem essentiam constituens.

EXAMEN.

A Ttributi vox latius longe patet, quam ut debeat vel possit hac definitione restringi. Æquivalet ea voci accidentis, quando accidens in sensu logico sumitur pro eo, quod opponitur substantiae, quo sensu substantia dicitur *substare accidentibus*, quae sic dicuntur stare super substantia, tanquam super basi & fulcro, sicut substantia stat, sub illis ea sustinens & sustentans. Sunt istiusmodi accidentia sive attributa duorum generum; alia vera sunt & realia, alia a quibus subjectum tantum denominatur, tum revera in illo non sint subjecto, sed vel in apparentibus tantum vel in cogitatis. In apparentibus sunt ea, quae ex. gr. in nostro corpore vel in aliis videntur esse, quum tamen non nisi in sensuum nostrorum sint perceptionibus, ut dolor, calor &c. In cogitatis sunt varii considerandi modi, qui per errorem saepe tanquam in rebus spectantur, ac de iis affirmantur, quia ab his saepe nomina imponimus rebus, quae tamen in rebus non sunt sed in nostra tantum cogitatione; nec possunt hi considerandi modi ad certum numerum revocari. Huc spectant primum omnes notiones Logicae & Metaphysicae, quatenus ut summa rerum genera & ut affectiones rerum spectantur; dein omnes relationes, sive illae fundamentum habeant in rebus particularibus quibus assignantur, sive in rebus aliis, quae cum his nostris, quibus ea attributa assignamus, comparantur. Quantum attinet ad attributa vera & realia, ea iterum dividi debent: Alia enim sunt attributa essentialia, quorum in qualibet substantia unum tantum est, quod istam substantiam /16/ constituit & ab alia distinguit, alia vero sunt modi, quibus substantia aliter atque aliter se habet. Habent autem haec realia attributa hoc iterum commune, quod ratione sui subjecti semper aliquam notionem substantiae involvunt: Essentiale enim attributum idem est quod ipsa substantia, neque aliter nisi logice a substantia differt, quando substantia ut subjectum, attributum vero illud ut praedicatum substantiae inhaerens consideratur, reipsa vero idem est quod substantia & cum illa recipro[ca]tur; at modus in suo conceptu aliquid involvit substantiae, neque sine substantia, cujus est modus, concipi & intelligi potest, etsi substantia possit intelligi sine hoc vel illo modo, unde cum substantia non recipitur.

6. 『エチカ』第1部定義5の吟味 (p. 16)

/16/

DEFINITIO V.

Per modum intelligo Substantiae affectiones, sive id, quod in alio est, per quod etiam concipitur.

EXAMEN.

EX his, quae ad superiorem definitionem annotavimus, facile apparet, hanc non esse legitimam modi definitionem, quae sic plane confunditur cum attributo essentiali, cui haec definitio potest applicari.